

丈の高い草や低い草…

伝統地に多様性

6月中旬の木曽町開田高原。2年ごとに野焼きをする開田の伝統的管理の草地にアヤメの花が咲く。神戸大学大学院・生物多様性研究室の永田優子さん(25)は膝丈の草の中で植生調査をする。アヤ

一方、毎年の野焼きで管理する火入れのみの草地は、ススキやイダリが1畳前後の高さに勢いよく伸び、一見では他の草は見当たらない。大株のススキの陰に隠れて低い丈の草の花が咲くが弱々しい。ここでは草を採らないため、育った草は

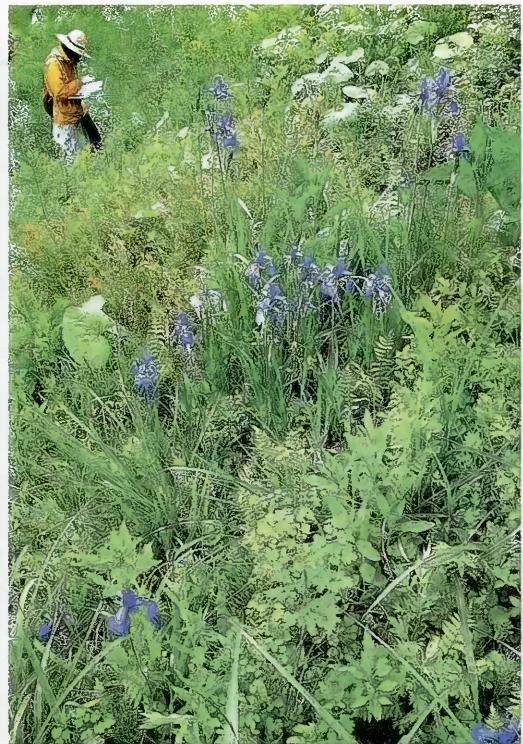
メの下ではアマドコロ、フタリシズカなど、灰になる。土壤のpHは「チョウの多様性は、中ほどの丈の草が花を咲かせ、地這(は)いのキジムシロの花も見える。

2年ごとの野焼きの伝統地は、1年目は飼い葉として草を持ち出す。火入れ地より土壤pHは低く、草丈も低い。永田さんは「秋には草丈が伝統地で90cm、火入れ地で150cmとなる。伝統地は光

そのまま春の火入れで、丈の高い草、低い草など、植物の多様性が維持できるのでは」とみる。

昆虫を調査する同大

開田の草地



アヤメの咲く伝統的管理地。ススキも他の多様な植物と共に生息している

江戸時代の大馬主の家、県宝山下家住宅館長の加村金正さん(73)は、神戸大の調査を2年前から見守り、調査結果を楽しみにしている。山下家を訪れる人には、馬とともに生きた開田の文化を語つてきた加村さん。「馬を飼っていた昭和30年代まで、里山は採草地が広がりいろいろな花が咲いていた。草原は、春の火入れ、秋の草刈りと、馬を中心とする開田の生活サイクルの原風景」と少年時代を振り返る。(田澤佳子)